

序

本資料は、国指定重要文化財である三浦梅園著作集の第一・主著『玄語』の初筆復元版を、現代日本人に読みやすいように総ルビ読み下し版としたものである。初筆復元版とは、訂正抹消前の、梅園が最初に書いた文字を本文としたものである。これまで刊行されてきた『玄語』は、梅園全集版、岩波版、さいごくしひろど三枝博音訓読版、三浦梅園資料館の開館記念事業のひとつとして出版された一行一対形式の総ルビ読み下し版などがあつたが、これらはいずれも梅園の長男である三浦黄鶴が校訂した版下本を元にしたものであつた。版下本では最終的な訂正・加筆が採用されている。

加筆・訂正・抹消は、梅園自筆の『玄語』に書き込まれているため、誰もが、梅園その人がおこなつたものと信じて疑わなかつたのである。ところが、ペリカン社刊行の影印版『玄語』や、資料館のデジタル資料を仔細に検討しているうちに、一人として訂正抹消を行つたのが梅園その人であることを証明していないことに気づいた。それで、加筆・訂正・抹消に注目して全編を見直したところ、結局、これは、数種に大別されることが明らかになつた。

- 一、明確に梅園その人のものであると判断できるもの。
- 二、梅園のものとも黄鶴のものとも判断がつかないもの。
- 三、黄鶴の独自の考えによる訂正としか考えられないもの。
- 四、長男黄鶴、次男玄亀による安永本からの転記（この転記にも訂正抹消がある）。
- 五、黄鶴・玄亀の筆であるが、もととなる文が安永本に見当たらないもの。

これらを判断する上で重要な手掛かりは、梅園と黄鶴では、引き線の描き方に明確な違いがあることである。しかし、これとて、訂正は梅園であるが引き線が黄鶴の場合、訂正・引き線ともに黄鶴である場合があるはずであり、両者を判別することは不可能である。内容的に類推しても、いずれとも判じかねる場合が多い。

その中で明らかに梅園その人の筆であると断定できるのは、結局、訂正される前の「初筆」だけである。そこで今後の『玄語』研究の基礎とすべきは、梅園の初筆を復元したものとすべきであるとの結論に達したのである。これを基準にして、加筆・訂正・抹消は、今後、その妥当性を吟味すればよい。

黄鶴の校訂において勘案すべきは、それが出版を目的としたものであるという点である。必然的に印刷の費用を考慮せざるを得ない。梅園も、出版するとなれば、どこを抹消し、どのような体裁にまとめるかを、黄鶴とも、弟子たちとも相談したはずである。だから、黄鶴の校訂とは言つても、そこに梅園の意見が反映されていないと考えるのは不自然である。不自然ではあるが、それは出版費用との兼ね合いから生まれた考えであるから、たとえ梅園の意見がそうであるにしても、それが本来の著述意図そのものであるとは言えない。あくまでも出版用校訂という制約の中での妥協案である。十分な資金があれば、思い通りのものを版下として作ることができたはずである。

現代では、もはやその制約はないのであるから、梅園の著述意図に近い、初筆を本文とした本来の姿の『玄語』を復元する方が自然であり、その方が、梅園の著述意図にいつそう明確に迫ることができる。

しかし、作業を完遂するには、いくつか障壁があつた。ひとつは、いま述べた黄鶴・玄龜による代筆である。これが安永本からの転記であることがわかつた場合は、安永本からの復元を行つた。しかし、安永本に見つからない場合は、そのままとせざるを得なかつた。それらには、口述筆記の可能性や、梅園の下書きの清書の可能性もあるが、今となつては、それを知ることはできない。また、虫食いや目視での判読が困難な抹消などがあつた。これらは、主と

してペリカン社刊行の『三浦梅園資料集』を参照して可能な限り元に戻したが、元の文字が判明しない場合は、訂正を探らざるを得なかつた。それは全体に比すれば一%程度のものである。

本資料作成の過程において、さらに重要なことが明らかになつた。それは、『玄語』には「通りの読み方があり、その一方を本文右の白と黒と傍点で表記し、もう一方を左の返り点・送り仮名で表記している」という点である。初期の研究者である三枝博音は、その著『三浦梅園の哲学』（第一書房 昭和一八年）の中で、「句點の打ち方に就いては今もって私自身も理解に苦しむところがある」（六二七頁）と書いている。三枝は、返り点・送り仮名に忠実に読み下しているのであるが、そうすると白ゴマと黒ゴマ、また白丸の傍点がどのような意味を持つのか、理解しかねたのであろう。

資料館から刊行された『玄語』を編集したとき、私は、かねてから着目していた、白と黒の傍点による一行一対形式での記述を視覚的に確認できるようにしたが、このときは、逆に、返り点・送り仮名に従つて読むと、二行一対形式が壊れることに大いに戸惑つた。記述の対称性を壊すような読み方になるのである。そのため、梅園指定の読みを無視した、強引な読み方をせざるを得ない場合が頻繁に生じた。それが、結局、梅園が指示した「通りの読みのひとつであることに気づいたのは、昨年のことである。傍点が白丸の文は、基本的には対称性を持つとはいひないので、この時点では重要視していなかつたが、最近になつて、これが重要な意味を持つことが明らかになつた。これらの傍点の機能については、後日出版する「条理整齊の読み」において解説する。

存命当時はもちろん、梅園没後も、黄鶴と相談役の矢野弘が生きている間は、この読み方は了解されていたのであるが、二人が没してからは、時代は既に幕末が近く、江戸日本は明治維新に向けた大きなうねりの中に飲み込まれていき、学問は一方向的な洋学攝取に傾いていった。二人は共同して校訂を行い、梅園文庫に残る「写本九三九」（こ

れは白ゴマ・黒ゴマ・白丸の傍点のみで返り点・送り仮名がない)と「版下本」を制作し、出版が叶わない中で、おそらくは二種類の読み方に対応した版を作り、閲覧用としていたのであるうと思う。

三浦家の縁戚である荒木家の蔵書であつた写本九三九は、完全な形で残されているが、三浦家所蔵の版下本は、本文の一部が欠落しており、図も残されていない。しかし、岩波日本思想大系「三浦梅園」で用いられている図は、全編そろつており、おそらくこれが版下本の図であろうと思われる。本文は、時代が動乱期にさしかかる中で、返すに返せない状況になつていったのではないかと推測される。本文の欠落部分が書かれていないということは考えにくくのである。この辺りの事情については、小野精一編『三浦梅園書簡集』（昭和一八年刊）に収録された三浦黄鶴の書簡（三十通）を調べれば分かる可能性がある。

『玄語』の一通りの読み方が、当時では当たり前のこととして理解されていたことは、いま述べたとおりであるが、明治四十五年になつて『梅園全集』が発行され、初めて印刷版として『玄語』が出版されたときには、すでにこの読み方は忘れ去られていた。また、図版の表裏・左右の位置などは、再現されなかつたため、これも梅園の著述意図とは程遠いものとなつた。図の配置は絶対に変えてはならないが、それを理解できなかつたのである。

この全集版『玄語』には、黄鶴のものとしか考えられない改竄がそのまま反映されているため、これを研究用底本とした論文は、ことごとく黄鶴の解釈ミスを引きすることとなつた。岩波書店の「三浦梅園」には、田口正治博士の校訂された『玄語』本文が収録されているが、これも版下本と自筆稿本の加筆・訂正をもとにしたものであるため、誤植がほとんどないという以外の利点は見られない。図版も縮小の上、頁全面に羅列されているため、結局は誤植を訂正した全集版『玄語』となつてしまつてている。

つまり、明治四十五年から今日に至るまで、梅園の本当の姿の『玄語』を読んだ人は居ないのである。その上に、

屋上屋を重ねるように、著作や論文が執筆されていったのだが、結局、それらは梅園の『玄語』の研究ではなく、黄鶴による出版校訂用『玄語』の研究となってしまっている。ただし、これは版下本の歴史的価値を貶めることにはならない。三浦黄鶴と矢野弘の校訂は二十数年に及んでおり、偉業の名にふさわしいものである。

今回、これらの問題を全面的に解決するものとして、初筆復元版『玄語』の漢文版、白黒の傍点に従つて対称形に読んだ版、返り点・送り仮名に従つて通常の漢文のように読んだ版をそれぞれ作成した。ふたつの読みのうち、前者を「条理整齊の読み」（または「粲立の読み」と呼ぶことにし、後者を「運為變錯の読み」（または「混成の読み」と呼ぶことにした。これは「例旨」に以下のような解説があることを根拠にしている。

この故に斯の書の文は、物に於ては、條理整齊に務め、事に於ては、運為變錯に出づ。苟くも事に斯に從わんと欲せば、讀中、須く先ず辨すべし。此れや天、此れや人、此れや事、此れや物なりと。而して後に以て始めて 斯の語を讀む可し。

『玄語』には、一種の読みがあることが、ここに明記されており、これを理解して初めてこの本が読めると、著者である三浦梅園が書いているのであるが、これまで誰ひとりとして、これを分離して『玄語』を読んだ人は居ない。この資料は、このような問題に決定的な終止符を打つために制作された。作成された資料は三部から成る。ここに至るまでに、二十年、一万八千時間を費やした。同郷の後学として、いくらかは梅園先生の足跡を明らかに出来たのではないかと考えている。

なお、本資料および資料館開館記念事業のひとつとして出版された『玄語』の読みは、江戸学の大家であり、三浦

梅園の資料研究の第一人者である五郎丸延氏の指導の下に為されたものである。私のもともとの読み方は、コンピュータでの処理に好都合なように、機械処理的な規則に従っているもので、とうてい、印刷出版に絶えられるものではない。それが、漢文の読みとしても特に不自然なものとなつていなければ、氏の知識に由来するものであり、決して私の力によるものではない。もし不自然なところがあるとすれば、それは私の間違いか、『玄語』の特殊性に由来するものである。ここに改めて謝辞を述べさせていただく。

ただし、電算機を用いた古典研究においては、情報処理に適した読みの規則が作られて然るべきである。今日に至つてなお後藤点（後藤芝山の読み方）や益軒点（貝原益軒の読み方）に縛られる必要はないようと思われるが、機械処理に適した読みをそのまま印刷物にすると、あたかも方言をそのまま活字化したかのような無思慮なものとなる。「読む」という行為に適した読みと、電算機による「処理」に適した読みは、印刷物の上と、電算機の中と、その所在を分かつべきものであるが、電算機によるスクリーニングに耐えられない解釈は、結局は、誤読であることになる。古典研究においても、時代は変わりつつあるのである。

ここに日本漢学においては、日本独自の思想・思考様式、また、日本人の頭脳における情報処理手順を知るためにも、電算機処理に適した読みの規則が考案されるべきであると考える。そのような作業から、伝統的な日本が新たな装いを以て、思考の空間の中に浮上してくるのではないかと思うのである。